

「小林多喜一全集」の編纂過程「戦前編」

伊藤 純

一 戦前の小林多喜一著作発刊概要

小林多喜一の小説、評論などの著作は、戦前、厳しい禁圧の下にありながらも、多くのものが刊行されている。生前刊行された主なものをあげると――

- 一九二九年 『蟹工船・一九二八年三月十五日』 戰旗社（日本日本プロレタリア作家叢書2）
- 〃 『蟹工船・改訂版』 戰旗社
- 一九三〇年 『不在地主』 戰旗社（日本評論社（日本プロレタリア傑作選集12）日本評論社（日本プロレタリア作家叢書2）『蟹工船・改訂版』）
- 〃 『蟹工船・改訂版』 戰旗社（日本プロレタリア作家叢書2）
- 一九三一年 『東俱知安行』 改造社（新銳文学叢書26）
〃 『壁にはられた写真』 改造社（『ナップ傑作集』）
〃 『戦ひ』 新潮社（作家同盟農民文学研究会『土地を農民へ』）
- 一九三二年 『オルグ』 戰旗社
『沼尻村』 作家同盟出版部（日本プロレタリア作家同盟叢書2）
- などである。
- さらに一九三三年二月、官憲によつて拷問虐殺されるという衝撃的契機の直後には、全集を含む十点近い著作が集中的に刊行された。この集中的刊行について、貴司山治は戦後、『新日本文学会版小林多喜一全集第三巻月報』⁽¹⁾（以下「全集の歴史」と略称）で――

『転形期の人々』改造社

『地区の人々』改造社

『地区の人々・改訂版』改造社

『小林多喜二全集 第二巻』国際書院

『蟹工船、不在地主』新潮文庫

『蟹工船、工場細胞・改訂版』改造文庫

の存在が確認され、貴司の証言が事実であることが確かめられる。

一方、コップ「日本プロレタリア作家同盟・伊藤注、以下同」中央常任委員会では、「小林多喜二全集」の刊行を決議して、四月

(一九三三年)には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一回配本(第二巻)を出した。

一方、コップ「日本プロレタリア文化聯盟、作家同盟の上部団体」でも小林労農葬記念事業として、かれが命をかけてたたかれた時期の論文をあつめた「日和見主義に対する闘争」一巻を出版した。五月には、私共の企画により組織外において改造社から「不在地主・オルグ」「地区の人々」「蟹工船、工場細胞」、国際書院から「転形期の人々」、九月には遺稿の部分をふくめた「転形期の人々」を改造社からそれぞれ刊行した。これらの総刊行部数は十数萬に上った。

以上の活動は、小林の虐殺に封する当時のプロレタリア文学運動からの逆襲として、計画され、実行されたものである。

しかし、この“逆襲”的ラッショウがすぎると、刊行は目に見えて少なくなる。一九三五年に入つて刊行されたナウカ社版『小林多喜二全集』全三巻と、『小林多喜二書簡集』『小林多喜二日記』くらいである。日中戦争の始まつた一九三七年(昭和一二年)には、三笠書房の叢書の一冊に採録されているが、さらに、この年の六月、『小林多喜二隨筆集』という一本が、発禁本や関西の労働運動資料の蒐集家である長尾桃郎の編として書物展望社から刊行されている。その経緯については最近の『日本近代文学館年誌』に島村輝氏がコメントしている。⁽²⁾

このように、戦前を通観すると、小林多喜二の作品について

“全集”と銘打つた刊行物は――

と証言している。

なお、一九三三年内の小林多喜二著作の刊行物を国会図書館で検索すると――

『不在地主、オルグ』改造文庫

『日和見主義に対する闘争』プロレタリア文化聯盟出版部

『転形期の人々』国際書院

一九三五年『小林多喜二全集 第一巻』(蟹工船)と「不在地主」を収載)日本プロレタリア作家同盟編、国際書院

(右記を『作家同盟版全集』と略称)

一九三五年『小林多喜二書簡集』ナウカ社

一九三六年『小林多喜二日記』ナウカ社

(右記三種を併せて『ナウカ社版全集』と略称)

の二種類である。

筆者は先に別稿「小林多喜二全集の編纂過程——『貴司山治日記』にみるその表裏⁽³⁾」で、戦後最初の小林多喜二全集(編纂事業である一九四七年から一九五三年のいわゆる『新日本文学会版小林多喜二全集』)の編纂過程について検討した。幸いこの時期に関しては貴司山治日記⁽⁴⁾に比較的具体的な記述があるために、その様相をある程度明らかにすることことができた。しかし、

戦前の全集編纂事業については、非合法時代ということもあって貴司日記にもほとんど記載はなく、さらには、弾圧のみならず作家同盟をめぐる複雑な組織事情などもからんで、その実態は極めて不明確である。

幸い、最近、関西大学名誉教授浦西和彦先生から『新日本文学会版全集第三巻月報』をご恵贈いただき、長年求めていた貴司の『小林多喜二全集』の全文を確認することができた。それほど長い文章ではないが、それでも、戦前的小林多喜二全集編纂過程の骨格的な流れを確かめることができた。これに、片々たる関連資料や諸版の版面などの考証を加えることによつて、ある程度の状況を推定することができる。

もちろん、まだまだ資料や諸家の言及の見落としは少なくないと思うが、とりあえず現時点で考え得たことを以下にまとめ

たいと思う。

小林多喜二が虐殺された直後に刊行された『作家同盟版全集第二巻』は、今では稀観本であり、国立国会図書館にはその扉に「禁安1—498」という発禁本である旨の標記がある、内務省納本と思われる一冊が所蔵されている。

奥付によれば発行日は昭和八年四月五日で、翌六日に発禁処分になつている。⁽⁵⁾

貴司はこの出版について前記のように「ナルプ中央常任委員会では『小林多喜二全集』の刊行を決議して、四月には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一回配本(第二巻)を出した。」と述べており、これが、作家同盟による多喜二虐殺への“逆襲”的一つであり、周辺資料などから考えると、“逆襲”的闘いの「核」と位置づけられていたのではないかと考えられる。

作家同盟は、三月一五日の労農葬にあわせて機関紙『文学新聞』の「多喜二追悼号」を出している。その第四面最下段に作家同盟出版部の名で『小林多喜二全集 全六巻』発刊の大きな広告が掲出されている。そして実際に四月五日には第二巻が発刊されているのである。

この本が刊行されたのは、虐殺の日からわずか一ヶ月半後のことである。

二 虐殺への抗議を籠めた『作家同盟版全集』



図1『文学新聞・多喜二追悼号』(1933/3/15)
の第一面と「小林多喜二全集発刊広告」

貴司はこの時期に、多喜二虐殺についているが、その中で半非合法状態の『文学新聞』編集部の作業の情景を描いている。

まるで機関車の火夫か何ぞのやうに働いてゐた。ねるひまも何もない秋から冬へ、その団体の非公然編輯部で、数人の仲間と朝から夜中まで、夜中から朝までといふ風に、石炭をもやしつづけてゐた。

……夜のあける前にはよく温度

が氷点下何度と言つて下ることが

あつた。寒さに耐へられなくて、汚い、戦場のやうになつた部屋の中で、古新聞や反古を燃やして手を焙つてゐる

(5)

この時期には、通夜、告別式、三月一五日の労農葬など、警察と対峙しながらの危険なイベントが続き、さらに、作家同盟は前記のように、改造社などの外部出版社と協働して多種類の多喜二作品の編纂刊行を進め、あるいは『文学新聞』『プロレタリア文学』（作家同盟の機関紙誌）の特別号も発刊するなど、資金難と発禁で正規の三月号が発刊できなかつたというシビアな状況を克服し、たゞひとでない仕事量をこなしている。そこには、みなみならぬ“逆襲”の情念の沸騰を感じるのである。

これは多喜二虐殺時点よりも数年前、作家同盟がもつとも活動に活動していた時期の情景だが、虐殺後も変わるもの、いや、もっと暗く緊張した状況だつただろう。編集部は東京西郊、お

そらく、まだ武蔵野の面影の残る畠や森の合間の粗末な隠れ家

の“離れ”か物置かであつただろう。周囲の畠や泥道には夜明けともなると霜柱がびっしりとたつ。そのようなところで、人々は“逆襲”的情念を燃やし続けたに違いない。

三 『作家同盟版全集』第二巻の内容

②『蟹工船・改訂版』戦旗社、一九二九年一一月
(①から「一九二八年三月十五日」を除いたもの)
③『蟹工船・改訂版』戦旗社、一九三〇年三月(日本ブロレタリア作家叢書2)

(広告などから普及版という位置づけらしく、定価も若干安い)

貴司の「全集の歴史」には『作家同盟版全集』は多喜二虜殺直後に作家同盟中央常任委員会で決定して発刊したと書かれて

いる。ただ、編纂の実態は不明で、本として残されている「第二巻」にも解題とか編集後記、編纂者の連名などは全くない。

そこで、とりあえずこの第一巻にも採録され、かつ一九二九年

年以来、いろいろな版が刊行されている「蟹工船」を“指標”として、『作家同盟版全集』のありようを検討してみたい。『蟹工船』は小林多喜二の作品の中でもベストセラーであり、繰り返し刊行され、原稿も相当程度保存され公開されている。

『作家同盟版全集』刊行までのそれらの資料や刊本を列挙する

・原稿(一部)初出誌のための活字指定などが書き込まれた清書稿⁽⁷⁾
・初出『戦旗』一九二九年五月／六月号
・刊本――

この中で、版面が特に注目されるのは③の一九三〇年三月戦旗社刊のもので、ほぼ総ルビとなつてゐるのである。原稿や初出誌、および①にも若干のルビはあるがごく少ない。ところが③は平易な漢字にもすべてルビがふつてある。普及版という位置づけらしく、他の「作家叢書」が七〇銭／一円の価格設定なのに対して、五〇銭と安い。より広く新たな読者層を獲得しようとしたものであろう。

そして、『作家同盟版全集』(以下⑤と略記)もまた、ルビが多い。③と⑤の発刊の間には三年の隔たりがあるが、編纂、版行の上で何か関連があるので無いかと考えたくなる。ところが、この、とともにルビの多い③と⑤を子細に較べると、どうも⑤はルビの多い先行版③を利用ないし参照したとは思えない相違が見

④『蟹工船・太陽のない街・鉄の話』改造社、一九三一年五月
⑤『作家同盟版全集 第二巻』作家同盟出版部編、国際書院、一九三三年四月

――などが挙げられる。

①『蟹工船・一九二八年三月十五日』戦旗社、一九二九
年九月(定本日本プロレタリア作家叢書2)

乗り言葉を指示している。ところが⑤では何もない。

この二例だけでも、「エグ」とか「サイド」という読みを期

待する作者の意を通じるためにはルビは必須である。ところが二人はデキの手すりに寄りかゝって、船牛が甲のびをしたやうに延びて、海を抱え込んでゐる面館の街を見た。漁夫は指元まで吸いついた煙草を喉と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたやうに色々につくりかへつて、高い船腹をそれから落らへ行った。彼は身體一杯酒臭がつた。

赤い太鼓腰を解いて、浮かばしてゐる音船や、藤原最もらしく海の中から片舟をグイと引張らへよもるるやうに、思ひしきり側脚に傾いてゐるやうな黄色い、太い煙突、大きな鍋のやうなツイ、南京虫のやうに船の間をなはせはしく結つてゐるランチ、寒いごろわめている油燈やバードの匂だ根端の鎖を下しちゃった。甲板を、ドロス・パイプをわざと外人が二人同じところを何度も見渡し人形の

(8)

⑤は、ルビが比較的多い割には肝心の、ルビ必須と思われるところにそれが欠落しているなど、全体的にルビのつけかたも恣意的で、編纂は杜撰の感を免れず、何を底本としたかも明らかでない。

四 作家同盟の複雑な組織事情

図2 一九三〇年戦旗社刊の

『蟹工船・改訂版』表紙と冒頭

普及版とされ総ルビ、定価も五〇銭と安く設定されている。(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより引用)

ひるがえつて、発刊主体の作家同盟の状態を検討してみよう。当時の作家同盟は、組織的に複雑な状況に陥っていたと、一九六五年、貴司は岩波の雑誌『文学』誌上で尾崎秀樹との対談で述べている⁽⁸⁾。



出される。

例えば、「蟹工船」冒頭の有名な一行――

「おい、地獄さ行ぐんだで！」

は原稿にも初出誌にも③にも「行ぐんだで！」という東北訛りに近似した特徴的な箇句訛りがルビで指定されている。ところが、⑤にはルビがない。

あるいはそのすぐあとの一

「高い船腹すれぐに落ちていつた。」

の「船腹」はこれも原稿も初出誌も③も「船腹」と特殊な船

八年(一九三三年)の一月末に、佐多稻子がきて小林多喜二が会いたいといつてゐる、といふのですね。それで、指定された場所、渋谷宮益坂の途中にある古本屋の前で会つたわけだ。まず彼は、どうだつたかね、と聞くんだ。ところが、小林は前年にはぼくを平同盟員に叩き落とす先頭に立つたわけです。それで、どうだつたかねといふのは、ふざけていやがると思って、君の「独房」という小説のとおりだよ、といったら、赤い顔してゐるんだな。あの「独房」

というのは非難されたでしょう。それとのおりだということは、一種のひどい皮肉だからね。

……そのあとで私に対して、作家同盟の中央委員会に帰つてくれ、というんです。

……帰つて何をするんだ、といったら、林房雄と鬭つてくれというのだ。林房雄はそのとき、すでに作家同盟をやめちやつているのだな。だからそれじやピントが外れているということにならないかといったら、実はといって、作家

〔多喜二の書いた〕林房雄を対象としての、日和見主義にして闘えという文章ですね。〔多喜二が〕それをどうか「どう思うか」というから、……そうすればするほど、林は遠くへ行つちやうし、林に続いていろんな人が離散していくという結果に対して、君はなんにも考えないでやつているのは、困つたことだとか、そういう意見をいつたんですね。そうしたら彼は、卑怯だからみんな逃げるんだという意味のことしかいわないのでですね。

同盟内のフラクション（共産党員）は、鹿地（亘）、山田（清三郎）、川口（浩）、女では宮本（百合子）、佐多（稻子）、それから坂井徳三もそうだといつたけれども、その鹿地、山田、川口、三人がプロシクを作つちやつて、自分との連絡を切つて、コップの指導、党の指導に従わない、というのだな。……というような状況を説明して、作家同盟の、今までいえば修正主義的な傾向と鬭つてくれ、というよう

な意味合いの話なんですね。……そんなことを話して別れ

たんですが、そしたらすぐ後でつかまつて殺されちやつたんです。（傍線は伊藤）

小林の方針というのは、やればやるほど作家同盟がつぶれる方向でしかないのですね。それは小林だけではなくて、宮本の方針でもあつたわけです。鹿地亘が同盟内の党员のキヤップをしていて、小林と宮本の「こういう」意見にたえず対立したということ、それは鹿地が書いていますね。

と述べている。

つまりこの時期、作家同盟は共産党ないし上部機関たる文化聯盟がコントロールできない造反状態に陥っていたのだ。この事態は、考えてみると、戦旗社事件⁽¹⁰⁾以来の、鹿地亘という人物の一貫した姿勢が反映しているとも考えられる。鹿地の、大衆団体の独自性を擁護し党官僚支配に抵抗する頑固な姿勢が感じられる。

このような多喜二の「林房雄にたいする鬭争」、つまりは「日和見主義に対する鬭争」に対して、貴司は前記「貴司・尾崎対談」の中で――

五 小林全集発行事業の文化聯盟・党中央への移行

このような組織状況の中で、全集発行事業の体制に変化が起つてくる。続刊が出ないまま、広告だけが“跳梁”する。

作家同盟機関誌である『プロレタリア文学』一九三三年五月号には半頁の発刊予告広告が出ている。ただこの広告では、発刊母体が作家同盟ではなくその上部団体である「プロレタリア文化聯盟」にかわっている。そして、全集の巻数が三月の作家同盟広告では六巻だったのが七巻に増えている。

さらに、「一月発行の『プロレタリア文学』二巻六号——それは奇しくもこの雑誌の最終号であるが——には見開きの巨大な広告が登場する。巻数はついに一〇巻全集へと肥大し、「九月第一回配本で来年九月に完結！」と、過ぎ去った過去の第一回配本期日をうたっているのである。もちろん、発行主体は「文化聯盟」である。

『作家同盟版全集』発行事業が上部団体に移行していくたことを、貴司は「貴司・尾崎対談」の中では簡単に――

そもそも多喜二全集は作家同盟で出すという話だった。

そうしたら、宮本百合子なんかが小林多喜一は、作家同盟だけの人間ではないから文化連盟のほうで出すべきだ、といいだしたわけだ。それがしばらくしたら、文化連盟で出

すのも身のほど知らずだといつて、党中央部で出す、という話になつた。

とだけ述べている。これはこれで、当時の左翼組織や組織人の“組織エゴ”や“大衆团体蔑視”が透けて見えるが、実際は



図3 『プロレタリア文学』二巻六号（1933/11/15発行）の『小林多喜二全集』見開き広告

それ以上に、"造反者"鹿地^{トクジ}とともにこの重要な仕事をやらせておけるか、という組織上の問題も大きかったのではないだろうか。

六 一九三三年中の編纂事業の実態と挫折

『作家同盟版全集』の一冊は"無かつたこと"になり、全集発刊の仕事が上部機関であるプロレタリア文化聯盟（実質的に共産党中央）に取り上げられた結果、発刊事業はどう展開しただろうか。新たな所管者となつたプロレタリア文化聯盟の機関誌『プロレタリア文化』には「大衆の手による『小林多喜二全集刊行』を提唱す」という"大号令"が掲載されている。⁽¹⁾

この"大号令"は二段組み八頁に及ぶ長大な「檄文」で

日本資本主義の危機の状態は、それを切り抜けるための満蒙侵略戦争開始後と雖も依然として進行し、寧ろ戦争によつて一層破滅的状態となつたが故に、今や支配階級は人民の思想、文化の自由さへも奪ひとらねばその侵略戦争を「今日以降もはや一步も進ませ得ない」（荒木陸相の演説）までの危機に陥つた。

を遂行する唯一の階級として今日現実の歴史の上に登場したのだ。過去に於いて最も知的に洗練されてゐるインテリゲンチヤがこの歴史的使命を自覚し、身を以てプロレタリアートの側へ移り来り、果敢な闘争の先頭に立つことは資本主義第三期の一つの特徴ある現象である……

と、まず"革命は必然でかつ間近だ"というコミニテルン三二一年テーゼに準拠した第三期論が展開される。そして——ロレタリアートの闘争の一翼として闘われてのみその本来の革命的階級的意義を貫徹することが出来る。

小林全集を成功的に実現せしめるることは、たゞ革命的プロレタリアートの闘争の一翼として闘われてのみその本来の革命的階級的意義を貫徹することが出来る。

今日まで……日本プロレタリア作家同盟においては、小林全集刊行の事業を革命的プロレタリアートの立場から、下からの統一戦線の樹立のための闘争の形態として提唱し遂行することについて小ブルジョア的見解がこれを妨げた。この見解の主要特徴は今日コップに全集刊行のための何らの経済的條件がないところから、直ちに全集の刊行をブルジョア出版業者に委託し終えれば足ると考えたところにあつた。……同志小林の虐殺の下手人××〔天皇〕制テロルに対する大衆闘争の上に展開し、遂行せしめるといふ革命的政治的觀点——ここから出発することによつてのみ実

際に大衆的方法によつて刊行し得るといふ認識——を欠いたところから来ている。

と断じ、六項目にわたる詳細な「組織プラン」まで提示している。

では、この壮大な提案は実行されたのか。事業体を、「作家同盟」という「大衆団体」から「文化聯盟」という共産党直下の上部組織に格上げすることによって、より優れた制作スタッフが組織され、仕事が展開されるかと思うと、どうもそうはならなかつたのである。

「貴司・尾崎対談」にその後の顛末が語られている。――

――ということで、共産党であれ文化聯盟であれ、結局非法組織では扱いようもなく、非党員でシンパの貴司に話しが廻ってきたのである。そこで貴司は刊行会を立ち上げ仕事を進めようとした。しかし、一九三三年中、全集刊行に漕ぎ切ることはできなかつた。同時代の貴司日記（一九三四年三月二六日）には、この挫折の理由が直截に書かれている。

小林が死んでひと月ぐらい経つた春のころに、佐多稻子が来て、宮本が会いたいといつてゐるが会わないか、といふから、いいだらう、ということで、場所はぼくのほうで指定して、何時間も話したな。宮本は当時は、とにかく最高幹部の一人でしたね。そのとき、いろいろな問題をぼくに持つてきたわけですよ。……〔その中の一つが文化聯盟・党中央が刊行主体となつた『小林全集』の件で〕宮本は党中央で出すと決めているから、その仕事をぼくにやつてくれ、というのだな。そこで党中央で出さなければならない必要はどこにあるんだとぼくは聞いたわけだ。党中央で出せるわけのものでもないし、出すべきでもないし、

「コップ・文化聯盟は」内部的に、人的に、組織はもはや腐朽してしまつたのだ。私がコップの主觀的要素〔彈圧などの外部要因に対し組織側の状況〕の崩壊ということに逸早く気づいたのは小林全集刊行会の仕事を通じて、全コップのどの同盟のいかなる機関ももはやその機能を停止しているといふことを知つた〔一九三三年の〕八九月ごろだった。⁽¹²⁾

もっと広範な大衆的な小林多喜二全集刊行会を作つて、そこで出すようにすべきだと主張したわけです。けつきよく彼もそれに賛成して、ぼくが刊行会を作つた。発起人は、山本実彦はなつてくれたが、嶋中雄作は断つてしまつたよ。しかし水ノ江滝子は賛成してきたし、いろんな人がたくさん入つてきた。……三百円ぐらいの金が集まつたかな……

ある。

刊行会が党中央（宮本）に直結した合法活動だと気づいている者は幸いに一人もなかつたが、この仕事やらそのほかの、当時の党活動への協力やらで、たえず宮本と連絡して仕事を進めて行く内に、協力者としての池田寿夫がやられ、杉本良吉がやられ、ついに宮本顯治もまた検挙され

て「一九三三年一二月」、私は合法面にとりのこされてしまい、どうすることもできなくなつた。その内に私も亦検挙されてしまつた「一九三四年一月」。……

となつてゐる。前金三百円が預かり放しという状態で、事業は一旦潰えたのである。

七 一九三五／三六年の『ナウカ社版全集』発刊

貴司は一九三四年一月から約三か月間、杉並警察署留置場に拘禁される。二度目の長期拘禁であり、この間に、「良心的作家として合法面で書いていける範囲に後退する」という転向戦略を公表し、三月二六日に釈放される。

そして、それ以降の一九三四年後半、三五年、三六年とい
う二年半は、むしろそれ以前のプロレタリア文学全盛期よりも、よりまとまつたいくつかの仕事を果たしたように見える。その一つが『小林多喜二全集』（ナウカ社版）の編纂刊行だったので

小林多喜二全集をナウカ社から出すことに旧臘に話がきまりその編輯についてこの間、中野重治を同道、同社へ行つて社主の大竹氏と相談し、小説のみを三巻に別けて出すこと、一冊六百五十頁位とし、四六判一円五十銭、初版千部、印税一割、刊行会へ申し込んできている分を二百人とみ、その人たちには一人につき第一冊を一円二十銭に割引く……⁽¹³⁾

と具体的な記載があり、また、編集実務を佐野順一郎に行わせると書かれており、貴司のプロデュースでいわゆる『ナウカ社版全集』の発刊が実行されたことが確認できる。刊行会申込者を割り引く、というのは前章でふれた刊行会前金払い込み者に義理を果たすという意味だと思われる。

この『ナウカ社版全集』という仕事をなぜ行つたか、どのように行われたかは「全集の歴史」にその骨子が書かれている。

一九三五年に、私は幸い又自由をとりもどしたので、一存でやはりこの「党委託」の仕事をつづけることにきめ、ナウカ社を発行所として、小林多喜二全集を小説だけ三冊、

この全集発刊については貴司日記一九三五年（昭和一〇年）一月一五日の項に――

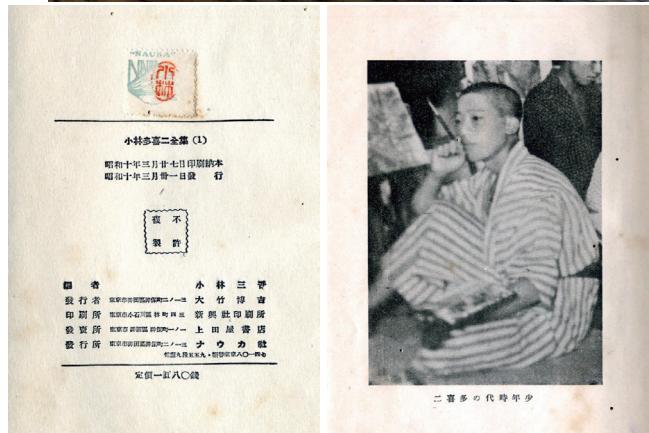
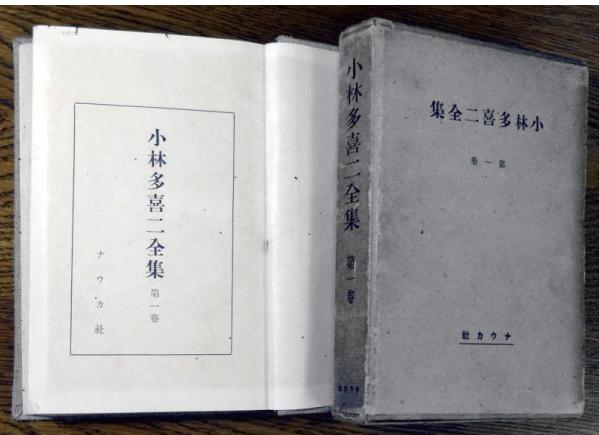


図4 一九三五年ナウカ社刊の『小林多喜二全集』(個人蔵)
「表紙扉と外箱」「扉写真」「奥付」

文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であつた。おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができ、ずいぶん樂しかつた。もつとも、この仕事が「党遺託」の仕事であるのを知っていた中野重治、宮木喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた。(傍点伊藤)

そういうことを知らないまま、私の

助手として松原宏遠、丸山義一、鹽田民夫(鹽田はナウカ社員として)がはたらいてくれた。書翰集のためには故村山籌子が長いあいだむくいなき協力をつづけてくれたのがいまも忘れない。書翰と未刊行原稿のためには小林三吾がはたらいた。三吾のかげには、齊藤次郎その他の小林の旧友が、はたらいてくれたのだが、その時は名を秘していて十数年後になつてわかつた。

そして、ふりかえってみると小林全集刊行の過去のたたかいは、これに参加してはたらいた多くの人々の内、私をはじめ、党員でない者が中心となり、党員はそれに助力する格好で推進されたのが特徴である。

論文はどうしても出せそうにないのでこし、代りに書翰集、日記各一冊を編さんして、合計五冊を刊行した。この発行部数合計二万である。

この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごしの仕事となつた。このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などには相談にあづからてくれる人もなく、多くの旧ナルプの

そして、戦後、何の心配も無く多喜二の文章に接することができる時代になつて発刊される『新日本文学学会版全集』を祝うこの一文の最後を、貴司はこう結んでいる。

全十一巻、別冊二巻という小林多喜二全集の決定版が世に出るはこびとなつたことは、祝福にたえないのだけれど、私にはいまになつてこの立派な全集をみることのできない杉本良吉、池田寿夫、村山籌子らの幻がなつかしくてたまらない。

『ナウカ版全集』発行の経過は、上記の貴司の文章でほぼ語られていると思う。さらに具体的に、この全集の個々の作品が、何を底本としどのように編纂検討されたものなのかについては、この全集には解題も解説もついておらず、別個に書誌的な調査が必要である。

この全集編纂過程で集められた資料は、戦時中、どのように秘匿され、どこにいったのか、戦後の編纂事業とどうつながったのか、というのも興味のある点である。

戦後最初の全集編纂事業である『新日本文学学会版全集』編纂の前半期に貴司は深く関わっており、その編纂委員会の様子を折々に日記に書き留めているが、戦前のナウカ版とのつながりについては不思議なほど言及がない。むしろ、例えば関西学院の川並秀雄の下で「オルグ」の完全ノートを発見したことを大

きな成果として書いているなど、戦前自ら編纂した全集の不完全さを自覚していたように見える。また、勝本清一郎や手塚英孝の持つている資料を編纂委員会に引き渡せるようにいろいろ手を尽くしている情景がチラリと描かれている。

これらの資料は、貴司が編纂委員会を去る時に「あとは党員諸君で好きなようにやりたまえ」⁽¹⁵⁾と言い残しており、その時実質的に委員会に残つた藏原、宮本、壺井（繁治）、手塚らが継承し、共産党所蔵になつたと考えられる。その一端は『小林多喜二 草稿ノート・直筆原稿〈DVD版〉』に見ることができる。

さらに、先述した島村輝「小林多喜二研究と貴司山治の役割」では、『ナウカ社版全集』の基盤となつた資料の一部が、日本近代文学館の「川並秀雄文庫」に含まれているのではないか、と指摘されている。

以上のように、今後の研究に期すべきものが少なくないと思われる。

八 “党の委託”はあつたのか

結局、戦前の小林多喜二全集編纂に、一貫して関わつたのは貴司山治であることが、ほぼ確かめられるが、その経緯は錯雜している。貴司はこれを「党の遺託」に基づいて行つた仕事、と述べるが、その意味と経過を整理しておこう。

まず、最初の全集である『作家同盟版全集』にどう関わったかは、具体的なことは判らない。丁度この時期、一九三三年後半、小林多喜二の『右翼日和見主義との闘争』の矛先を受けて貴司は作家同盟中央委員から追放されていた。ただ当時作家同盟に立て籠もつて中央に対して造反中だった鹿地亘とは、つかず離れずの間柄だったことが日記から推察できるし、小林の死後、「党生活者」の中央公論掲載について立野信之とともに中公編集部の相談にあずかり、グラの分散秘匿、『作家同盟版全集』への採録を前提とした製版・紙型取りを行い、その紙型をいはずれかに秘匿した、といった相當に立ち入ったことをしているので、それなりの深い関与があつたと考えなければなるまい。

この後全集事業が文化聯盟・共産党中央に移行していく中で、貴司は、宮本頤治と密会し「共産党版の多喜二全集発行に、合法面のプロデューサーとして働いてくれ」という依頼を受ける。貴司は「非合法組織発行というのは到底無理だし、たとえ本を作つても広く頒布できない」とその非現実性を指摘し、一般読者を前提とした「刊行会」で発刊するという一種のカモフラージュ作戦を提案し、宮本の了承を得る。しかし、働き手となるべき「文化聯盟」は崩壊し、一九三四年早々には貴司自身も拘禁されるにいたつて、この計画は瓦解する。

貴司は一九三四年三月治安維持法違反での起訴を前提に保釈され、六月に懲役二年執行猶予四年の判決を受ける。貴司はこの事態を前記のように「私は幸い又自由をとりもどした」と受

け止め「一存でやはりこの『党遺託』の仕事をつづける」とにきめ……る。時代は既に日中戦争開戦前夜という緊迫した状態になつてゐる。かつての活動家は獄中にあるか、あるいは『小林多喜二全集』編纂などということには「旧ナルプの文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心」を粋つた。「おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができ、ずいぶん楽しかった。」と貴司は皮肉をこめて「うそぶく」のである。

そしてこの『ナウカ社版全集』の仕事は「委託」ではなくて「党遺託」と位置づける。つまり、委託者の宮本頤治は下獄して不在、共産党も壊滅して、委託者がいなくなつてしまつたらら「遺託」ということになる。

中野重治は、この一連の貴司の言説に、若干の疑問を呈している。それは「全集の歴史」のなかの「この仕事が『党遺託』の仕事であるのを知つていた中野重治、宮木喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた」という一節である。中野は、貴司のやつているナウカ版発刊の仕事が「党遺託」とは意識していないなかつたという。そこで中野は、戦後、宮本頤治に「小林多喜二全集の仕事を党中央委員会で行うことになった」という事実があつたのかを確認したが、そのようなことはなかつた、という答えだつたというのである。¹⁶⁾

戦後になつてからの、このあたりの微妙なやり取りを少し考えてみると――

確かに、『共産党中央委員会』といった組織が正式に議決したかどうかは知るよしもないが、少なくとも、プロレタリア文化聯盟という作家同盟の上部機関の組織的決定はあつたと考えなければならない。前記のように機関誌『プロレタリア文化』には全集発行の長大な檄文が掲載されており、これは檄文であると同時に、傘下の同盟組織に対する指令文書である。機関決定なしにこのような文書が、機関誌上に、勝手に載るわけがない。

中野重治は「委託」と「遺託」を区別せずに語っているが、二つは異なったことなのである。そして、宮本が「委託」に關して共産党中央の関わりに言葉を濁すのはおそらく、「文化聯盟版」として行おうとしたその事業が失敗に終わったための、政治家としての『おとぼけ』ではないのだろうか。

九　“情報現象”としての文学

定なしにこのようない文書が、機関誌上に、勝手に載るわけがない。

そして、この文化聯盟といふものの実態は何であつたかといえば、作家同盟はじめ多くのプロレタリア文化団体を統合する連合本部であり、実質は共産党の文化政策を傘下の“大衆団体”たる各同盟に下達するバイブルであつた。従つて、共産党中央(といつても実質的に文化政策の面では宮本顕治その人であろうけれど)の了解なしに、ことに、「刊行会」組織という“貴司好み”的大衆的手法を含む事業計画を檄するはずはないと考えられる。

おそらくこれは、『受託者』たる貴司の意見を宮本が取り入れた結果の指令ではないかと思う。

つまり、一九三三年の文化聯盟の全集編纂事業について、貴司に合法面の役割を「委託」したこととは、事実だつたと考へるべきであろう。ただ「党的委託」はそこまでであつて、宮本もいなくなり共産党もなくなつた一九三四五年の段階で、貴司が全集編纂事業に踏み切つたのは、自らのべているように「二存」であり、誰かの委託によるものではない。

戦前、厳しい禁圧下にあつた小林多喜二の作品が、どのように遇されていったかということを「全集刊行」というかたちを追うことで検討した。そこに見出されるのは、禁圧下にもかかわらず、人々がこの、二九歳で虐殺されたナイーブな魂と身体をもつた青年の言説を、何とかして維持し、秘匿し、折あればメディアに乗せて世に送り出そうとした、その執念の軌跡だった。

つまりは、多くの人々の『想い』が小林多喜二のテキストの維持と伝播を支え続けたのだ。

私は本稿で、戦前の小林全集の「書誌」を描こうと思つたわけではない。

そうではなく、私は「文学」という“情報現象”的総体を考えたいと思う。——ある作者によつて物語られたテキストが、身近な人々に受け止められ、やがてメディアに放たれ、読み手に到達し、読み手の生活觀に一定の変容を誘起し、それがまた

読み手の生活の輪を通して更なる世界に広がっていく……バルト (Roland Barthes) は「読者の誕生は『作者』の死によってあがなわれる」と述べたが、ここでは、比喩ではないそのとおりの」とが、生起し波動して広がっていくのをみる」ことができるのではないか。

改稿が多いので、保存されていた自筆原稿によつて原型を復元したもののもを以下で閲覧可能。

貴司山治 web 資料館

<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/ko/ko.pdf>

また私家版貴司山治小説集『丹波アリラン』(1960年一月)にも収載。

(7) 『小林多喜二 草稿ノート・直筆原稿〈DVD版〉』(雄松堂、1960年1月)。

注

- (1) 貴司山治 「『小林多喜二全集』の歴史」(『新日本文学全版小林多喜』全集第三巻月報)日本評論社、一九四八年)。以下「全集の歴史」と略称。
- (2) 島村輝 「小林多喜二研究と貴司山治の役割——当館所蔵資料を中心にして」(『日本近代文学館年誌 資料探索』第八号、1961年1月)。
- (3) 伊藤純 「小林多喜二全集の編纂過程——『貴司山治日記』にみるその表裏」(『立命館言語文化研究』1111巻1号、1961年1月)。左記で閲覧可能。
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kyou/pdf_23-3RitsILCS.23.3pp.67-84ITO.pdf
- (4) 貴司山治日記・戦後関連部分は翻刻されていないので、以下を参考。『貴司山治全集』(DVD版)一九一九年～一九七一年』(立命館大学貴司山治研究会編、不二出版、1981年1月)。
- (5) 内務省警保局『禁止單行本目録』復刻版(湖北社、一九七六年七月)。
- (6) 貴司山治「子」(初出『改造』一九三三年八月号)。但し伏せ字や

件」として報じられた。したがって、今回の作家同盟の「もめごと」は、彼の二度目の造反ということになる。鹿地に関しては、戦前の戦旗社、作家同盟に腰を据えての活動の評価がもう少し検討されてもいいと思う。貴司は日記で非常に多くの悪罵を鹿地に放っているが、根底では共感をもつていたようだ。作家同盟の解散、「文学案内」の編集など重要な局面で協働している。『文学案内』の中国関係の情報の窓口として、当時上海にいた鹿地は大きな役割をはたした。貴司は鹿地を上海の内山書店内山完造に紹介し、鹿

地はその内山の周旋で魯迅と昵懇になり、一時は自宅に寄寓するまでの関係になったという。そして『文学案内』には、魯迅の著名な文「忘却の記念の為に」と、誌面を飾る近影をもたらしている（翻訳も鹿地がしている）。

(11) 「大衆の手による『小林多喜二全集刊行』を提唱す——『小林多喜二全集刊行会』の意義と任務」『プロレタリア文化』三巻六号、一九三三年八月)。

(12) 貴司山治「日記 一九三四年(昭和九年)(一)」『国文学』八一号、一九三四年八月)。

文書による中央委員会

常仕中央委員会の一員の麥免に用いて

わが作家同盟初五回大会は、官民大佐ある不當なる解散にも拘らず、直ちに代評議会評議會に開催し、報告、評案の全部を承認可決し、中央委員会を選出しに於て常仕中央委員会を選定す。この半端も一応完了した。然るに、常仕中央委員会が選出に用いて、正規の中央委員会を肩越す得なかつたを統計上より不備から、東京及部より、同支部選出の中央委員会を通じて、同志貴司山治を常仕中央委員の一員としてうことに反対の意見が提出されたる結果を招致した。理由とするところは、同志貴司山治が今までに多くの重大な誤謬を犯したといふところにある。そして東京及部ほどの代りに、同志征不二天を推薦してゐる。常仕中央委員会はこれが決定ま中央委員会に於ては、必要を認め、これは石川向應に於いて、文書は依然中央委員会を承認する。

但し、常仕中央委員会は、同志貴司、征不二天をもう一人同志武田麟太郎を常仕中央委員候補者に推薦する。依つて各中央委員は、同心貴司、征、武田の内、何人か常仕中央委員として選出づるかについて、末る六月、日にちに、文書を以つて、常仕中央委員会をして書記局鬼通達されたり。

五月廿日

日本プロレタリア作家同盟
常仕中央委員会

図5 「一九三二年五月「文書による中央委員会」チラシ(小樽文学館所蔵・池田文庫)

一旦選出された貴司に東京支部から異議が出されたので、貴司、征不二夫、武田麟太郎の三人で再選舉するから郵便で連絡せよ、という趣旨

(13) 貴司山治「日記(四)」『国文学』八六号、関西大学国文学会、一九三四年一月、治研究 不出版、二〇一一年一月、一九三四年一月、一九三八年二月、二四〇頁)。

(14) 佐野順一郎・貴司宅に長年寄寓してゐたこともある高知出身の作家志望者。『文学案内』にいくつか作品が載つて

(15) 「貴司日記」一九六五年八月一二日の

(16) 項『貴司山治全日記（DVD版）一九一九年（一九七一年）前掲）。中野重治「書かれるべき小林伝について」（『年刊多喜二百合子研究』第一集、河出書房、一九五四年四月）。